

## No.1：日本酒ブーム～栃木の酒蔵 浸透に期待～（令和4年7月26日）

2021年の日本産酒類の輸出金額は約1,147億円と初めて1千億円を突破した。香港への輸出金額も、20年の約100億円から約148億円へと大幅に増加しており、その6割以上を清酒、いわゆる日本酒が占めていることが特徴的だ。

香港は日本酒ブームと言われている。最近も大手小売店のシティ・スーパーで「清酒祭」と称するフェアが開催された。多くの人が集まり、日本酒の人気ぶりを垣間見たところである。



【「清酒祭」の会場の様子】

そこで、香港の日本酒事情を探るべく、香港で10年間、酒バーを運営していた日本人や香港人国際唎酒師にインタビューを行ったので、概要をお届けする。

まず、日本酒を飲む層だが、男女を問わず20代から40代によく飲まれている。これらの年代には日本好きな香港人が多いことが影響しているようだ。

味わいについては、一般的には、香り高くフルーティー、甘口の日本酒が好まれる。酸度が高い日本酒は苦手だが、食事とのペアリング次第で飲まれることもある。

さらに、国際コンペティションで受賞歴のある日本酒は好まれる。今年は、井上清吉商店（宇都宮市）の「澤姫 吟醸酒 真・地酒宣言」がIWC（インターナショナル・ワイン・チャレンジ）で、外池酒造店（益子町）の「燦爛 純米大吟醸 夢ささら」がKura Masterで最高賞を受賞したため、香港でも人気が高まるだろう。

これから香港へ日本酒を輸出しようとする酒蔵が気を付けるべきことは、バイヤーとの契約だ。以前は商習慣として専属販売契約を結ぶことがあったが、現在は一般的ではないようだ。専属販売契約を結ばなければ、銘柄や売り先でバイヤーを使い分けることが可能だが、専属販売契約を結ぶことでバイヤーが熱心にプロモーションをしてくれるケースもある。専属販売契約を結ぶかどうかは、バイヤーをよく見極めた上で、慎重に検討する必要があるだろう。

最後に、既に香港へ日本酒を輸出している酒蔵にとっては、常に新商品を発表していくことが重要だ。バイヤーとよく相談しながら、季節ものや企画ものを発表していくことが輸出量増加の鍵となる。

栃木の酒蔵がつくる日本酒の質の高さは疑いない。おいしい栃木の日本酒を、香港に住む方々に味わっていただきたい。

（県香港事務所長 卯木啓之）